「ソアイエのシンポジウム」-ヴィクトリア朝のセレブリティ・シェフが夢見た万国の饗宴-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2013-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小宮, 彩加 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/14863

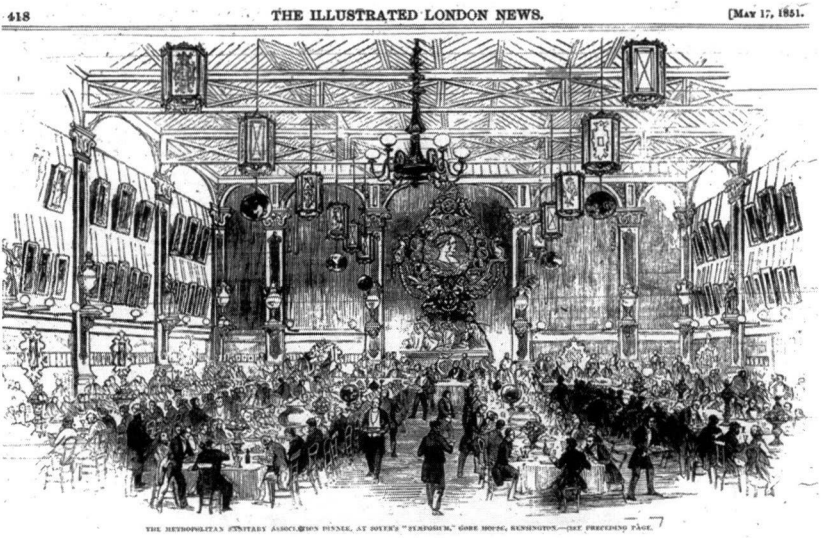
明治大学教養論集　通巻476号
(2012・1) pp. 1-17

「ソアイエのシンポジウム」：
ヴィクトリア朝のセレブリティ・シェフが夢見た万国の饗宴

小　宮　彩　加

1851年5月10日。第1回ロンドン万国博覧会の開場から10日ほど遅れて，万博の会場であるハイド・パークの前に 'Soyer's Universal Symposium of All Nations' という名前のレストランが開店した。レストラン名に含まれる「シンポジウム（Symposium)」とは，プラトンの著作『シンポジウム』(紀元前385-380年）の場合と同じで，古代ギリシャ語で「饗宴」，「酒宴」を意味する言葉である。そして，"Soyer" というのは，ヴィクトリア朝時代随一のセレブリティ・シェフ，アレクシス・ソアイエ（Alexis Soyer, 1810-1858）のことだ。つまり，これは「万国が集うソアイエの饗宴」だったのだ。

レストランのオープニングを飾ったのは，「都市衛生協会（Metropolitan Sanitary Association)」の資金集めのための晩餐会であった。当時，大都市ロンドンが抱えていた衛生問題は，加速度的に深刻さを増していた。ヴィクトリア朝を代表する文豪チャールズ・ディケンズも，1850年に出版された『マーティン・チャズルウィット』の廉価版の序文において，貧民街の住宅の衛生状態の改善の必要性を訴えるなどしてこの問題に関心を寄せていたが，彼も都市衛生協会の会員として「ソアイエのシンポジウム」の晩餐会に出席し，乾杯のスピーチをしている。この晩餐会の様子は，レストランの内装や食事のメニューとともに新聞で報じられており，世間からの注目の度合いが窺われる（図1)。



The Illustrated London News（1851 年 5 月 17 日）より

図 1

このように華々しくオープンした「ソアイエのシンポジウム」であるが，開店からわずか 157 日後に閉店してしまったのだった。本稿では，大英帝国の最盛期であるヴィクトリア朝時代の半ばに登場し，短期間で呆気なく消えてしまった巨大レストランについて，その成り立ちや失敗の要因を考察したい。

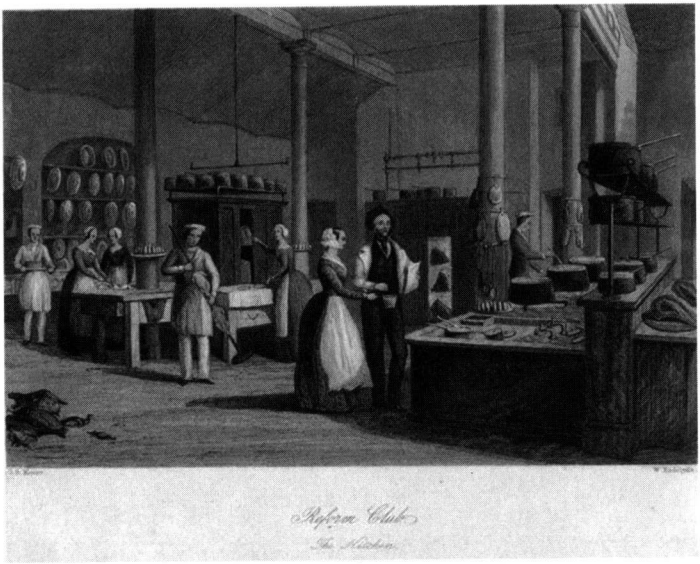
アレクシス・ソアイエは，フランス出身のシェフだった。若くして宰相ポリニャックのお抱え料理人となったのだが，1830 年にパリで起こった 7 月革命後の混乱を逃れ，1831 年にイギリスに渡ってきたのだった。ケンブリッジ公をはじめとした貴族に雇われ，料理の腕を振るうようになると，ほどなくして美食を愛するジェントリーたちの間でその名が知れ渡るようになった。そして，1837 年に新生の政治クラブであるリフォーム・クラブの料理長の座に就いたのである。

リフォーム・クラブは，選挙権を拡大した選挙法改正案，いわゆる「リフォー

ム・ビル」に賛成した急進的な政治家たちが，保守的な紳士クラブを脱会して作った新しい社交クラブだった。1841年にパル・マル街104番地に完成したクラブハウスは，国会議事堂の建築家として有名なチャールズ・バリー（Charles Barry, 1795–1860）による設計で，他のクラブハウスを凌駕する立派な建物だった。そのクラブハウスの大きな目玉となったのは，バリーとソアイエが共同で設計した地下の厨房だった。それ以前は調理にはもっぱら木炭が使われていたのだが，これは火加減の調節が困難である上，燃焼時に発生する有害なガスが料理人の身体を蝕み，寿命を縮める要因となっていた。一方，ソアイエ考案の厨房は，世界で初めてガスを使用した厨房だった。幸い，リフォーム・クラブのあるパル・マル街は，イギリスで最も早く，1807年にガス灯が灯った通りだった。そのため，厨房にガスを引くことは容易だったのである。更にソアイエはガスだけでなく，蒸気や冷気も効率よく活用できるように何から何まで一分の隙もなく設計したのであった。この最新鋭の厨房の評判は世界中に広まり，リフォーム・クラブには，厨房の見学客が跡を絶たなかった。ロシア皇帝までもがロンドンを訪れた際に見学していったそうだ。1846年の1年間だけでも15,000人以上がキッチンの見学に訪れたという[1]。厨房の様子を描いたポスターや，設計図が見学客の土産用に販売されるようにもなった（図2）。

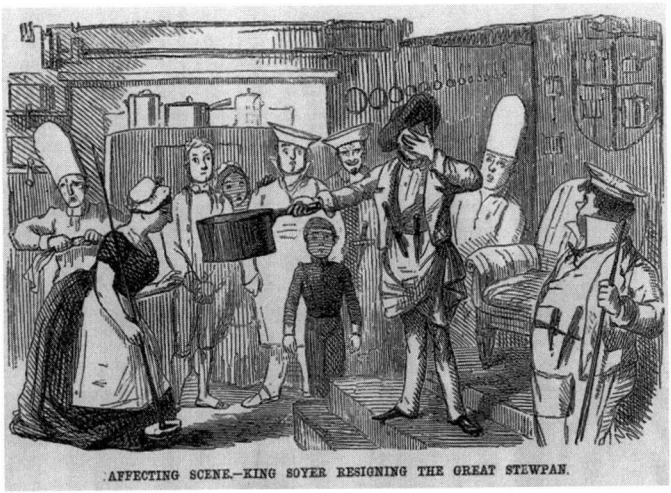
さて，このリフォーム・クラブの名物料理長としてクラブ設立時から君臨したソアイエであるが，1850年5月13日にクラブを去ってしまう。ソアイエの辞任は雑誌『パンチ』をはじめ，いくつもの新聞で取り上げられるほど衝撃的な事件だった（図3）。なぜ，ソアイエはリフォーム・クラブを辞めてしまったのだろうか――様々な憶測を呼んだが，結局その理由は明らかにはされていない。とにかく，クラブの会員たちからも惜しまれつつ，円満にリフォーム・クラブを辞めたようである。

フリーの料理人になったソアイエは，その後もいくつかの盛大な晩餐会の料理を手掛けてメディアに登場している。中でも注目すべきは，1850年10



リフォーム・クラブのキッチン。中央にいるのがソアイエ

図 2



『パンチ』（1850 年 5 月 25 日）より

図 3

月 25 日，イングランドの主要都市の市長たちが，大英博覧会に向けた支持を示すために万博の発起人のアルバート公を招いてイングランド北部の都市ヨークで開いた晩餐会である。巨額の予算を与えられたソアイエは，珍しい高級食材を用いた料理だけでなく，会場の装飾にも贅の限りを尽くしたという。

ヨークでの晩餐会を機に，世の中はロンドン万国博覧会に向けて盛り上がっていくのだが，そのような中，万博の運営委員会からソアイエに万博会場でのケータリングを担当して欲しいという依頼があったという。1851 年 1 月にソアイエは次のような手紙を受け取っているのだ。

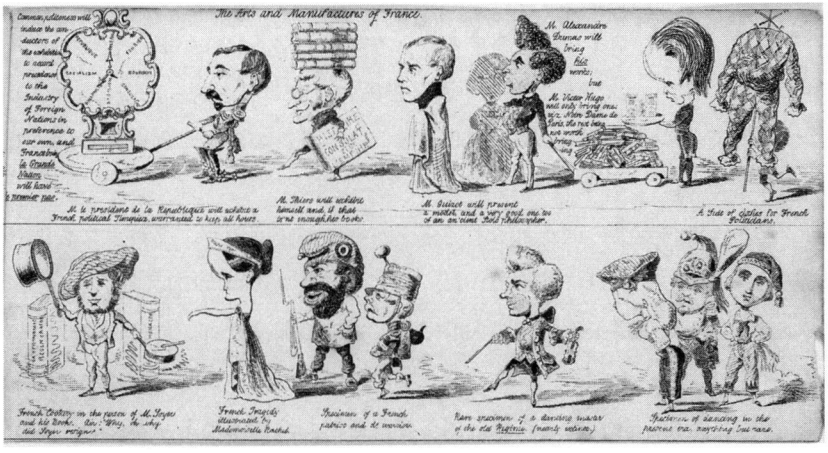
> Sir, — If it is at all your intention to tender for the refreshments at the Exhibition, and you think it may be advisable to have *single* glasses of wine served, will you be kind enough to mention such wish in your tender?[2)]

ソアイエが担当するというのなら，「万博会場内は酒類は一切禁止」という条件を緩和し，ワインを提供することも許可しなくはない，と譲歩する内容だったのだが，ソアイエはこの運営委員会の申し出を断ったのだった[3)]。なぜなら，このとき既にソアイエ自身のレストランの計画が動き出し始めていたのである。

ソアイエは博覧会の開かれるハイド・パークの正面のゴア・ハウスを借りる契約を 1850 年 12 月に結んでいた。ゴア・ハウスというのは，もともとブレッシングトン伯爵夫人所有の大邸宅で，彼女の開くサロンには作家や芸術家が集い，ディケンズ，サッカレー，ブルワー・リットンなども常連客だったという。しかし，彼女は大変贅沢な好みを持つ浪費家であったため，やがて破産してしまい，ゴア・ハウスも手放さざるをえなくなってしまったのだった。ケンジントンの一等地にあり，賃料も高額だったのだが，ソアイエは万

国博覧会にやってくる大勢の客を見込んでゴア・ハウスを借りて，ここにレストランを開くことにしたのであった。

ソアイエによるゴア・ハウスの大改装は，半年後に控えた万国博覧会の開場日を目標に，急ピッチで行われた。壁画を担当したのは，弱冠21歳のジョージ・オーガスタス・サラ（George Augustus Sala, 1828–95）だった。のちにディケンズに気に入られて，彼の雑誌『家庭の言葉』に定期的に執筆するようになるサラであるが，この当時は絵描きとして生計を立てようとしていた。少し前に “The Great Exhibition: Wot is to Be” という，万博をテーマにした全長21フィートの風刺の利いたイラストを描いて話題になっていたのだが，そのパノラマ画の中でフランスからの展示品としてソアイエを描いていたのがソアイエの目にとまったのだった（図4）。サラは，ゴア・ハウスの3階まである階段の壁に，同様のカリカチュア・スタイルの長い壁画を描くことを依頼されて，住み込みで絵を描いたのだ。壁画が完成すると，今度はサラは工事中から訪れていた見学客に渡すための絵入りのパンフレットを作成した。ゴア・ハウスの建物がすっかりなくなってしまった現在でも，



左下で斜めに帽子をかぶり，鍋を振り上げているのがソアイエ

図4

当時のレストランの様子が分かるのは一重にこのパンフレットのお陰なのである[4)]。

この冊子をもとに，「ソアイエのシンポジウム」がどのようなところだったのか，少し見てみよう。まず，“Soyer's Universal Symposium” とレストラン名が大きく壁に書かれた入口（図5）から敷地に入り，そこかしこに彫像の飾ってある中庭を抜け，数段の階段を上がってメインの建物に入る。すると，そこは壁も天井も鮮やかな青に塗られたエントランス・ホールで，頭上には矢の束を掴んでいる巨大な手の絵があり，その中心からは四方に拡がる稲妻が描かれていたという。奥には “Soyer's Symposium” という文字がマジック・ランタンで映し出されているドアがあり，そのドアの向こうには「驚嘆すべき建築物の広間（Hall of Architectural Wonders）」という名前の部屋があった[5)]。セント・ポール大聖堂，ピサの斜塔，スフィンクス，コロシアムなどといった古今東西の著名な建築物の絵や模型が展示されており，大量に活けられた珍しい花からエキゾチックな香りが漂っていたそ

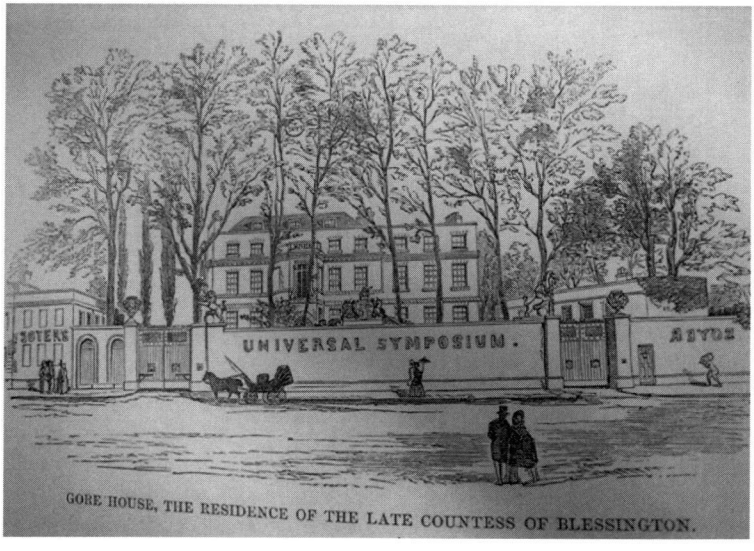


図5

うだ。ホールを抜けると，かつてブレッシングトン公爵夫人のサロンが開かれていた大広間が，ギリシアの神殿風に生まれ変わっていた。金ピカに輝くイオニア式の柱や銀色の造花の入った花瓶が飾られているほか，天井には夏の空の絵が描かれていたそうである[6]。

次の部屋には「ダナエーの結婚の間，または宝石のシャワー（La Salle de Noces de Danaë, or the Shower of Gems）」という名前がつけられており，壁には金と銀のティアドロップ型がエンボスされていた。緑色に金色の格子模様の天井からは8つの水銀ガラスの玉がぶら下がっており，これらがミラーボールのように光を反射する仕組みになっていたという。部屋の奥のフランス窓からは下のテラスに降りることができ，そこには「ワシントン・リフレッシュメント・ルーム」というアメリカン・スタイルのバーがあったという。これはロンドンで最初のカクテル・バーだったと考えられている。

ゴア・ハウスの1階のもうひとつの部屋は，「ペルーの森，または星空の夜（La Fôret Peruvienne, or the Night of Stars）」という名前がつけられていた。ここの装飾には本物のヤシの木が使われ，頭上には輝く月と星の模様のカーペットが広げられており，月夜の熱帯雨林が作られていたそうだ。

2階に上がると「ガリア風パヴィリオン（The Gallic Pavilion）」という，全体にフランスのトリコロールカラーを使った，ちらちらと目の錯覚を起させるような模様の廊下があった。そこを通って，「ポイボスの神殿（Temple of Phoebus）」という赤と金の部屋を抜けると，「永遠の雪の洞穴，または亜寒帯に棲むものたちのロカイユ（The Grotte des Neiges Eternelles, or the Rocaille des Lueurs Boreales）」という，北極の鍾乳洞を再現した部屋であった（図6）。ここでは北極キツネの剥製が飾られ，オーロラに照らされた北極の風景画があった。また，本物の氷を大量に使って部屋は常に冷え冷えとしていたそうだ。

そのほかにも中国風の部屋，イタリア風のベランダなども屋敷の中にあったそうだが，「ソアイエのシンポジウム」はレストランであるので，どの部

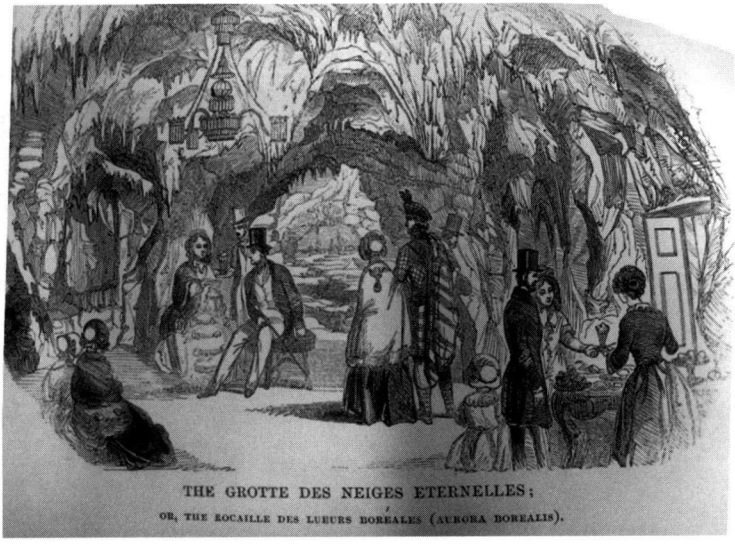


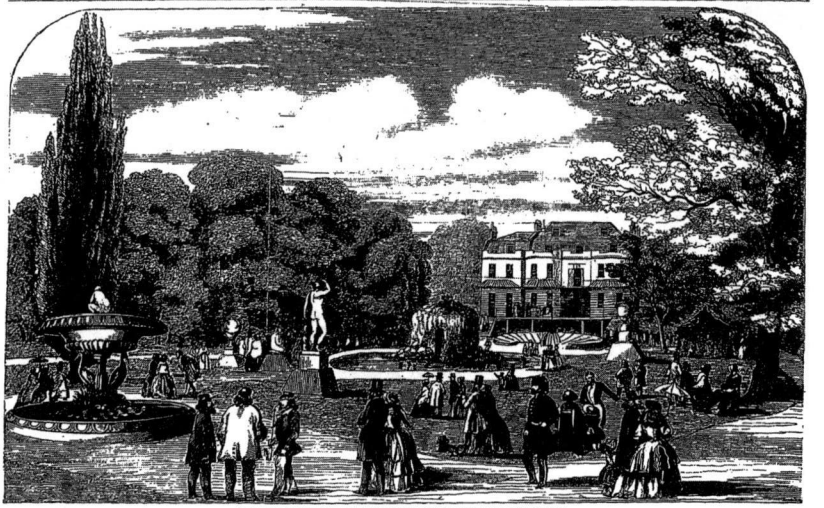
図 6

屋にもテーブルと椅子，食器類が用意されており，シャンパンと軽食をつまむことができたという。またパーティなどで貸し切ることも可能だったそうだ。

ゴア・ハウスの建物から庭に出ると，そこでは大道芸を見せる者がいたり，手相を読む占い師のテントがあったりして，様々なエンターテイメントが行われていた。そして，庭の中央には「オンディーヌの岩屋」が造られていたという（図 7）。鍾乳洞のような岩屋の入り口の上部からは常に水が滴り落ちており，濡れずに中に入りたい人は 4 ペンス払って傘を借りなくてはならなかったそうだ。そうして中に入って天井を見上げると，透明なガラスの中を金や銀の魚が泳いでいるかのように見える仕掛けになっていた。そして，岩屋の奥には青春の女神ヘーベーの噴水があったのだが，出てきているのは水ではなくお酒で，それを水の精オンディーヌに扮した見目麗しいバーメイドがグラスに汲んでくれたそうだ。

ゴア・ハウスの広大な庭の右奥には，ソアイエが「シンポジウム」のため

390　THE ILLUSTRATED LONDON NEWS.　[May 10, 1851.



M. SOYER'S "SYMPOSIUM" OF ALL NATIONS, GORE HOUSE, KENSINGTON.—THE GARDENS.

fortune-teller; and the impenetrable Grotto of Ondine, shown in the centre of the Illustration. This is a little pavilion of many-hued stalactites, the ceiling of dazzling crystal, through which are seen myriads of gold and silver fish. The grotto is surmounted with a statuette of Hebe, who, from her enchanted cup, dispense to mortals through the shafts of the temple artfully concealed liquors. In the centre of the lawn is a marble fountain group, of classic design; and to the right is the Baronial Banqueting Hall, in which the Sanitary Commission and her friends are feasted right royally this very day. The exterior is embellished; the roof is entirely of stained glass; the walls are hung with crimson drapery, and oil paintings by Madame Soyer; there are elegant statuettes, and vases of fragrant flowers; a music gallery, a dais for the chairman, &c.

Adjoining the garden is the *Pre d'Orsay*, with six greasy pyramids, surmounted by vases filled with flowers; at the extremity is "*Le Pavillon monstre d'Impératrice*; or, the Encampment of all Nations"—a regular dining saloon, to accommodate 1500 persons.

Here we take leave of the Symposium for the present, wishing M. Soyer all success in his new world of ingenuity; and the sooner the reader becomes initiated into their mysteries, the better for his mundane felicity. They are, unquestionably, worthy of Heidegger, or the master of the revels of any age.

中央に描かれているのが「オンディーヌの岩屋」。
The Illustrated London News（1851 年 5 月 10 日）より

図 7

に建てた「バロニアル・ホール（Baronial Hall）」という巨大なダイニング・ホールがあった。銃眼つきの壁が中世の城を彷彿とさせる，実際にはキャラコ布を使ってあるものの，古い石でできているように見える建物だったという。都市衛生協会の晩餐会が開かれたのもこのバロニアル・ホールだったが，ここは最大 500 人まで収容できるダイニング・ホールだった。万博会場のクリスタル・パレスを建てたのと同じ業者のフォックス・アンド・ヘンダーソン社が建設したので，天井のステンド・グラスなどにはクリスタル・パレスで使って余った建材が使われたそうである。壁には赤いドレープが下げられており，若くして亡くなったソアイエの妻で，画家としても名が知られていたエマ・ソアイエの作品を中心にたくさんの絵が飾られていた。ここでも，天井からぶらさがる水銀ガラスのミラーボールが光を反射させており，さら

にディナー客からは見えない，壁の内側にオーケストラ席があって，食事の間に生演奏を楽しめる仕組みになっていたそうだ。

もうひとつ，「シンポジウム」の敷地内にはバロニアル・ホールよりさらに大きな「万国の野営地（The Encampment of All Nations)」という名称のダイニング・ホールの入った建物も造られた。こちらは1,500人を収容できる，ロンドンで最大の食堂だった。長さ100ヤードのロング・テーブルが話題だったが，雑誌『パンチ』では，特注の307フィートの長さのテーブルクロスをどうやって洗濯するのか，というユーモラスな疑問を絵にしていた(図8)。ここは低予算で食事をしたい一般客用の食堂だった。博覧会の入場料には日によって様々に設定されていたが，1シリングで入場できる日に博覧会を訪れる多くの客をソアイエは見込んでいたのだった。

このように巨大で斬新なアミューズメント・レストラン「ソアイエのシンポジウム」は，5月17日に一般客にオープンした。はじめの1，2週間は万事がうまく行き，新聞各紙がその素晴らしさを絶賛している。サッカレーは，「ソアイエのシンポジウム」を万国博覧会のおもしろさに匹敵するものとして雑誌『パンチ』に書いている。架空のフランス人ムッシュ・ゴブムーシュ

『パンチ』20号より

図8

（訳注：「何でも真に受ける人」という意味）が万国博覧会に行こうと馬車に乗り，御者に「パレス・オブ・オール・ネイションズに連れて行ってくれ」と伝えたら，到着したのが「ソアイエのシンポジウム」だったというのである。

> "That is the Baronial Hall of All Nations," said a gentleman to me — a gentleman in a flowing robe and a singular cap, whom I had mistaken for a Chinese or an enchanter... I pause. I muse. I meditate. Where have I seen that face? Where noted that mien, that cap? Ah, I have it! — in the books devoted to gastronomic regeneration, on the flasks of sauce called relish. This is not the Crystal Palace I see — this is the rival wonder — yes, this is the Symposium of All Nations, and yonder man is Alexis Soyer![7]

しかし，開店から少し経つと，レストランは大きく赤字に転じてしまうのである。見込んでいただけの客が入らなかったのである。客足が伸びなかった最大の理由は，万国博覧会の入場券が一度退場した者の再入場を認めていなかったということだった。ソアイエは，ランチとディナーをあわせて，一日に5,000～6,000人の客があるものと見込んでいたのだが，ランチ需要がほとんどなかったため，客数は予想を大幅に下回って1日1,000人ほどだったようである。

そこでソアイエは，レストランに客を呼ぶために，同じくフランス出身の有名な指揮者である友人，ルイ・アントワーヌ・ジュリアン（1811-60）の協力を得て，「万国の野営地」を新しいタイプのミュージック・ホールに変えるというアイディアを思いついた。そのために必要な音楽演奏を可能にする認可の延長を願い出たのだが，不幸なことにその審査担当者は禁酒協会の会員だった。さらに運が悪いことに，彼が視察にきた日に限って地方から

200人くらいの団体客が来ており，彼らが「シンポジウム」のあちこちで酒を飲んだり踊ったりしていたのだった。その様子を目撃した担当者は眉をひそめて早々に帰ってしまい，ミュージック・ライセンスの延長申請は却下となってしまったのだ。ソアイエは新聞を通して抗議したのだが，評価は覆えることなく，憤慨したソアイエはわずか数日後の10月14日に突然レストランを閉店してしまったのだった。

一方の大英博覧会は，その翌日，10月15日に幕を閉じた。大英博覧会が4万2千人の客を集め，18万6,437ポンドの収益をあげたのとは対照的に，2万8,000ポンドかけて作ったレストランを閉店したソアイエのもとに残ったのは，7,000ポンドの負債だった[8]。

レストラン失敗の直接の原因は昼間に客が入らなかったということのようだが，それだけではなく，このレストランは時代の先を行き過ぎていたのだろうと私は考える。というのも，このレストランの斬新さは，当時の最新の仕掛けを施した建物だけにあったのではない。もうひとつ，あらゆる階級，あらゆる人種に開かれたレストランだったという点の方が実はヴィクトリア朝の人々を当惑させたのではないだろうか。サラのパンフレットでは，次のように高らかに宣言していた。

> From all quarters of the globe, civilized or uncivilized, will his visitors come — the doors of the Symposium will be thrown open to universal humanity.[9]

もともとこの第一回の万国博覧会には開催に反対する者が多く，アルバート公自らが地方都市に赴いて開催の意義を説くなどして開催に漕ぎ着けたのだった。特に会場となるハイド・パーク周辺のケンジントンの住民からは，博覧会を訪れる大量の外国人や無教養の一般大衆によりロンドンは無秩序状態に陥ると危惧する声が強かったのだ。

外国人に対する偏見が「食」を通して表されることは今でもよくあるが，ロンドン万国博覧会のときもそうだった。たとえば，『パンチ』に載ったイラストでは，中国人が鳥の巣，ねずみのパイに続いて仔犬を注文する様子が描かれている（図9）。しかし，「ソアイエのシンポジウム」はそのような偏見とは無縁で，客であれば外国人であろうと大歓迎するというのだった。「コスモポリタンの客がコスモポリタンの料理を望むのは当然のこと」と考えるソアイエのレストランでは，どんな国のどんな食の好みにも対応する用意があったのである。

さらに「ソアイエのシンポジウム」は，階級で客を差別することもなかった。高い料金を払える上流層の客のための本館とバロニアル・ホールだけでなく，1シリングで入場できるシリング・デイズに博覧会を訪れるような一

LONDON DINING ROOMS, 1851.

Waiter (to Chinaman). "VERY NICE BIRDS'-NEST SOUP, SIR!—YES, SIR!—RAT PIE, SIR, JUST UP.—YES, SIR!—AND A NICE LITTLE DOG TO FOLLER—YES, SIR!"

『パンチ』1851年カレンダーより

図9

般大衆のための経済的な食堂の「万国の野営地」もソアイエはゴア・ハウスに用意したのだった。

人種や階級で決して差別することなく，あらゆる人に平等でリベラルなところが，実は料理人ソアイエの特徴であった。ベストセラーとなった彼の数々の料理本も同様の姿勢で書かれていた。たとえば，リフォーム・クラブの会員のような上流階級に向けた料理本『美食学の改革者（*The Gastronomic Regenerator*）』（1846年）の後に，『現代の主婦（*The Modern Housewife*）』（1849年）という中産階級向けの本を出版し，さらに，『みんなのための1シリング料理（*A Shilling Cookery for the People*）』（1854年）を労働者階級向けに書いているのだ。上流階級だけでなく，あらゆる階級の人に平等に料理を提供するというのが，フランス人シェフ，アレクシス・ソアイエ独特の考え方だったのである。

しかし，そうはいってもレストラン文化に馴染みのないヴィクトリア朝時代の労働者階級の人々にとっては，有名シェフのレストランに行くなどということには全く考えが及ばなかったことだろう。また，一方で根強い階級意識のあった当時のイギリスでは，どの階級にも開かれたレストランなどというのは受け容れられないものだったのではないだろうか。ミュージック・ライセンスの更新が認められなかったのも，このような無秩序状態を作るレストランに対する危機感があったのかもしれない。結局のところ，ヴィクトリア朝当時のイギリスは，「万国が集う饗宴」を開くには時期尚早だったのだろう。

「ソアイエのシンポジウム」の閉店の翌年，万国博覧会の運営委員会はゴア・ハウスを6万ポンドで購入した。そして，「ソアイエのシンポジウム」を取り壊した跡に，ロイヤル・アルバート・ホールを建てたのだった。ソアイエがルイ・ジュリアンとゴア・ハウスで始めようと考えていた新しいミュージック・ホールは実現しなかったが，ロイヤル・アルバート・ホールでは，今日でも夏の間中，ルイ・ジュリアンが発案したプロムナード・コンサート

（通称プロムズ）が開催されている。そこに私は短命に終わったレストラン「ソアイエのシンポジウム」の幻影を見るような気がしてならないのである。

《注》

1）*Memoirs of Soyer,* 49.

2）*Memoirs of Soyer,* 197.

3）万博会場内の4つの食堂の運営権は，「シュウェプス」という，当時は無名の飲料会社に5,500ポンドで売却された。シュウェプスは，ソーダ水，レモネード，ジンジャー・ビアの瓶を109万2,337本，それにコーヒー，紅茶やサンドイッチなどの軽食も販売した。シュウェプスは，開催期間中に約7万6,000ポンドの収益を上げ，大企業へと成長したのであった（『水晶宮物語』参照）。

4）パンフレットは多数刷られたようであるが，完全な形で現存しているものは稀少である。ロンドンでも，ギルドホール・ライブラリが所蔵する一冊だけである。

5）マジック・ランタンとは当時流行していた幻灯機のことである。

6）かつてサロンの常連だったサッカレーは，ソアイエの友人ではあったが，ソアイエが改装したゴア・ハウスを悪趣味だと非難している。"To M. Soyer, on his 'Symposium'," *Punch* (7 June 1851) 233.

7）[Thackeray, W. M.] "M. Gobemouche's Authentic Account of the Grand Exhibition." *Punch* (10 May 1851) 198.

8）『水晶宮物語』，197ページ。博覧会の収益を元にして，ヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアムをはじめとするサウス・ケンジントンの博物館群が建設された。

9）*The Book of the Symposium,* 7.

参考文献

"Affecting Scene — King Soyer Resigning the Great Stewpan." *Punch.* 25 May 1850 : 204.

Blake, Peter. "Charles Dickens, George Augustus Sala and Household Words." *Dickens Quarterly.* 26. 1 (Mar 2009). 24–41.

Bullock, April. "Alexis Soyer's Gastronomic Symposium of All Nations." *Gastronomica.* 5. 4 (2005). 50–59.

Cowen, Ruth. *Relish: The Extraordinary Life of a Victorian Celebrity Chef.* London: Phoenix, 2007.

"London Dining Rooms, 1851." *Punch.* Calendar 1851 : 266.

"Resignation of Soyer." *Punch.* 25 May 1850 : 204.

"Metropolitan Sanitary Association." *The Illustrated London News.* (1 May 1851): 417.

"M. Soyer's 'Symposium' of All Nations, Gore House, Kensington." *The Illustrated London News.* 18. 484 (10 May 1851): 390.

"Mr. Punch's Tribute to Soyer." *Punch.* 9 November 1850 : 201.

"Refreshments at the Great Exhibition of 1851." *Punch.* 25 January 185 : 33.

Sala, George Augustus. *The Book of the Symosium; or Soyer at Gore House: A Catalogue Raisonné, Artistic, Historic, Topographic, and Picturesque or that Unique and Gigantic Establishment.* 1851.

Speech of Charles Dickens Delivered at Gore House, May 10, 1851. Printed from the Original Autograph Manuscript. Boston: Bibliophile Society, 1909.

[Thackeray, W. M.] "M. Gobemouche's Authentic Account of the Grand Exhibition." *Punch.* 10 May 1851 : 198.

"The Banquet at York." *The Times.* 26 October 1850 : 5.

"The Metropolitan Sanitary Associations Dinner at Soyer's 'Symposium,' Gore House, Kensington." *The Illustrated London News.* 18. 485 (17 May 1851): 418.

"To M. Soyer, on his 'Symposium'." *Punch.* 7 June 1851 : 233.

Volant, F. and J. R. Warren, *Memoirs of Alexis Soyer, with Unpublished Receipts and Odds and Ends of Gastronomy.* London: W. Kent, 1859.

"There is much speculation...." *The Times.* 3 Jan 1851 : 4.

"The Cookery of All Nations." *Punch.* 9 March 1850 : 100.

Yates, Edmund. "About Kensington Gore." *Fortnightly Review.* 39. 231 (1886): 398–403.

松村昌家『水晶宮物語 ── ロンドン万国博覧会 1851』筑摩書房，2000 年。

（こみや・あやか　商学部准教授）